

済南道中

伏園兄：

あなたはまだ夜航船の趣味を覚えているでしょう。この趣味にはあまり優雅でない非趣味も含まれていますが、すべての過去の記憶と同様、わたしの覚えているものはたいてい時間の熔化を経て変形したものでしかありませんから、思い出すとやはりまだ好い趣味なのです。平素紹興から杭州に行くにはいつも城内から出発します。（これは二十余年前の話です、）一度何人かの友だちと田舎から船で、この九十里一駅の道をまるまる半日一夜をかけて行きました。午後に出航して、夕方ようやく西郭門外に着き、そこで停泊して、みんなは上陸して酒飯を取りました。これはとても牧歌的な趣味で、田園画家の描写に値します。二日目の朝には西興に到着、埠頭の宿の主人がとても懇懇に客を引き止め、うなづいて“ご飯を食べて行きなさい”と言うので、中に入って奥の（文人は当然カウンターあたりに“短衣の連中”と並んで坐ったりはしません。）ぼろテーブルに坐ると、蝦の炒め物やアヒルの塩漬け卵など“家常便飯”〔普通の家庭料理〕を出すのが、やはり一種特別の風味がありました。残念ながらわたしは長らく長らく食べたことがありません。

今日は特急列車に乗って北京から済南に来ました。思わずふと昔の事を思い出しました。汽車の中で食べたのは西洋料理で、駅の物売りも皆柵外に締め出され、土地の食品を買って食べるのは容易ではありません。以前はこうではなく、一九〇六年わたしたちが京漢線で北京に行つて（その頃の大臣は水竹村人〔徐世昌〕でした）練兵処の試験を受けた時には、まだ車窓からいろんな物、例えば一個銅貨一枚の大きな洋梨や一羽銅貨十五枚の焼鶏の類などが買えて食べられたものでした。後でどこかの駅で兎の肉を買いましたが、同学に実はこれは猫だと言う者がいて、みんなは気持ち悪がって食べようとせず、窓から捨ててしまいました。日本の旅行では、新式の整った清潔さの中に、（いま日本の事については“ごくあっさり”一言半句並べるしかなく、でないといふ鄧先生の覆轍を踏む恐れがあります）、変わらず旧日の長閑な風趣を留めています。わたしは東海道で一箱“日本一の吉備団子”を買いました。桃太郎の遺風だとは証明できませんけれど、味はほんとうに悪くなかったのですが、残念ながらみんな子どもたちに分捕られてしまい、わたしは一つか二つ口にただけで、しかも又憎らしいほど小さいのでした。またふつうの“弁当”もあり、形も中身も要するに美術的で、味もよかった。肥魚大肉を食べ慣れた大人先生方の口には自ずと合わないでしょうが。少し“文明”的なのには“アイスクリン”があり、麦粉で作ったカップの中に入っていて、最後にはいっしょに食べてしまいます。——わたしは鉄製の急行に乗っていて、お腹が少し空いたので、何かおやつ、マンデスの物語の中の王子が食べたようなのを食べたいと思いましたが、現実には実際方法がなく、食堂車に行き西洋料理を食べるよりほかありませんでした。

わたしは決して西洋料理が嫌いなわけではありません。でも食べはしますが、もし強迫的に食べねばならなくなった時には、嬉しくはなくなるでしょう。もう一つ、中国を旅行する西洋人は確かにあまりにも礼儀がなさすぎます。たとい何か暴行するのではなくても、要するに気ままで嫌

われ者です。例えばわたしのコンパートメントの怡利洋行の老板は、子犬を一匹連れていて、天津で四十円も出して買ったということですが、彼は列車に乗るや高いびきで、子犬が部屋で小便をし、ボーイに三度も床板を拭かせました。又餌をやらす、あっちに行ったりこっちに来たりして、ワンワン鳴き叫ぶままです。わたしは動物虐待者ではありませんが、人が動物を溺愛し、犬猫を抱いて列車や船に乗り、他人の邪魔をするのを見ると、やはり嫌悪を催します。そうした溺愛は、まさに虐待と同じくいささか獣性的だと思います。西洋人の中にも当然真の文明人はいます。だが商人はたいていダメで、中国の商人と同じです。中国には近ごろ新しく“鬼をやっつける”——つまり“玄学鬼”ⁱⁱや“直脚鬼”^{せいようじん}をやっつける——傾向が出てきましたが、わたしは大体において賛成します。ただ彼らの態度にはいささか附和し兼ねます。われわれは一切の鬼や神をすっかりやっつけようとはしますが、それは不可能な事です。さらに彼らが位牌を拝もうが、魔除けの呪文を念じようが、当然何の効き目もなく、ただ中国人には法術士の気が満ちているか、あるいは一点の悪因を残すことを表明するに十分であります。われわれにでき、しなければならぬのは、如何にして玄学鬼あるいは直脚鬼に害をさせないかということです。わたしはあらゆる鬼はすべて害をなす者だと信じています。もしそのまま放って置くならば、たとえわれわれ自身の“曲脚鬼”^{まじあじん}にしたところで、どうしてそうでないことがあります。……ひとは言います。よもやま話をして最後になると、きっと下卑た話になると。いまわたしは逆にこんなクソ真面目な大道理を語るようになって、あまり定式に合わないようですので、もう続けて書かなくともよいでしょう。

民国十三年五月三十一日、津浦線の車中にて。

※初出：1924年6月5日『晨报副刊』

ⁱ 鄧先生の覆轍 未詳。

ⁱⁱ 玄学鬼 未詳。